

アントニーン・ドヴォルザーク

故郷への懐かしさがきらめく旋律

Antonín Dvořák (1841-1904)

ドヴォルザークが生まれたのはチェコ西部・ボヘミアの農村です。生家は宿屋と肉屋を営んでいました。父は民族楽器ツィターとヴァイオリンが得意な大の音楽好き。ドヴォルザークもヴァイオリンを習い始め、みるみるうちに上達します。家にやってくる旅芸人の音楽や、村人たちが踊る民族舞踊と触れ合いながら、ドヴォルザーク少年もヴァイオリンで民謡を奏でたと言います。そうした生い立ちが、作曲家ドヴォルザークの音楽を育みました。《ヴァイオリン協奏曲》の第3楽章では、少年時代の思い出の楽器ヴァイオリンが民族舞曲風のメロディを颯爽と演奏します。

B
2026
FEBRUARY
[第2059回]



幼少期のドヴォルザーク。
「鉄オタ」としても知られる彼だが、
この頃の故郷とウィーンを結ぶ鉄道の開通が
きっかけだという話も

©IKE